

言えば、アメリカン・デモクラシーということができのらうが、四半世紀前にダニエル・ベルの提出した「イデオロギーの終焉」がそれ自体イデオロギーであるとして批判されたのと同様に、フクヤマの主張もアメリカン・デモクラシーこそ人類の最後の理念だとする新たなイデオロギーであるといえるのではないか。ベルの「イデオロギーの終焉」よりもはるかに露骨な形でそれが提出されているように思えるのは、アメリカが冷戦に勝ったという認識がフクヤマの背景に控えているからではないのか。

フクヤマのこの本は人間が古代から直面してきた問題に正面から取り組もうとした著作に違いない。歴史が終わったと著者の言うその時点で、このような根源的な問題を扱った著書が世界中で話題となっているのは、考えてみれば皮肉なことである。しかし、長い20世紀がどうやら幕を閉じるにあたって、私たちはフクヤマが議論した根源的なレベルで現在の世界を歴史の

中に位置付ける知的努力をする必要があるのではないか。そうした知的努力をして初めて冷戦の終焉ということを議論することができるように思われる。冷戦にアメリカが勝ただとか、ソ連が負けただとかいったような皮相な冷戦の論じ方はこうした努力のなさを端的に表したものであると言える。根源的なレベルでの思考の後には、結局長期的には冷戦には勝者もなく敗者もなかったということがはっきりするのではないか。冷戦の負の遺産は多分すべての国家に及ぶはずだ。私たちはこれからの世界を考えていく時にそうした考察を抜きにしてはならない。

いずれにしても、『歴史の終わり』は様々な議論を引き出してくれる著書であることは間違いない。フクヤマの知的挑発に真剣に応えて、それに賛同するにしても反対するにしても、この議論に参加することがすべての知識人に求められるように思う。

しかし、人間はこうした自由に耐えられるであろうか。あらゆることを自分で選択し、しかもその選択に責任を持つということが「自由」であるとすると、自由とは非常に厳しいものであるということがいえる。私はこのような自由の厳しさを全面的に肯定するものではあるが、すべての人間がこうした自由に耐えうるとはとても考えられない。そのように言う自信など全くない。すべての人間の「個」がここに到るまでに鍛え上げられるとはとてもではないが信られないのである。そうであるとすれば、やはり完全な意味での「自由」など人間には手の届かないものなのではないか。人間はそれが理想だと知りつつ、その理想に耐えられるだけの強さを身につけることができずに、理想を放棄し、自由を拒絶し、自らの手を喜んで誰か他の人に縛らせようとするのではないか。フクヤマが述べる理想に私は同意はするが、どうしてもフクヤマ程には楽観的にはなれないのである。

自由の問題はこれにとどまらない。人間は決して一人では生きられない。人間にはその中に包み込まれて生きる「共同体」がどうしても必要なのではないか。完全に自由な人間も共同体の中でしか人間としては生きられないはずだ。しかし、共同体の中で生きる場合には程度の差こそあれ犠牲にされるのは、実は自由なのである。そうであるとすれば、人間の生と自由とは完全には両立しない代物だということができる。どこでバランスを取るかということが多分永遠の課題となる。そしてこの問題は決して歴史が終わった後の退屈な問題とはいえないのではないか。また、ほとんどの国家がこのバランスを極力「自由」の側に置く時代が本当にやって来るのだろうか。結論はそう簡単には出ない。

フクヤマの提出する、歴史の終わりの時に人類が到達した社会体制であるリベラルな民主主義は確かに国内体制としては十分であるといえるかもしれないが、現代の国際社会の多くの問題を実は解決することができない。現代の世界の直面している問題は、たとえば、環境の問題や人口爆発の問題や人間の移動すなわち移民の問題に典型的に表れているように、国境横断的な問題である。自由市場や民主政治は国内問題には一定の解答を示すことは可能だが、国境横断的な問題を解決するには十分なシステムであるとはいえない。私たちはリベラルな民主主義に対するものではないにしても、それを越える何ものかを構想しなくては現代の緊急の課題に適應することができないということは明らかである。フクヤマは国境横断的な問題をどのように自分の主張の中に位置付けるつもりだろうか。フクヤマの視野は余りにもドメスティックであって、グローバルな問題を消化できないように思う。そして、グローバルな問題は、現代の世界において、リベラルな民主主義国家ですら、自己の体制になんらの影響もなく解決できるようなマイナーな問題でなく、自己の体制を作り変えてでも取り組まなければならない人類にとって真に重大な問題なのである。リベラルな民主主義はその意味で究極の体制とは呼べないのではないか。グローバルな視点をそこに加える必要が絶対にあるのではないだろうか。そして、それはフクヤマのいうリベラルな民主主義とは異なった何かである可能性もあるのだ。

最後に再び問うてみたい。フクヤマは「歴史は終わった」と言うが本当だろうか。価値、理念のレベルでの争いは本当に終焉したのだろうか。フクヤマのいう最後の理念は、はっきりと

こともこの主張に近いといえるのかも知れないが、それが究極の体制であり、「歴史」の終わりであるとは私には思いも寄らなかった。

人間は歴史を通じて一貫して同じものを望んでいたのだろうか。経済的には物財の豊かさを望み、政治的には自由と平等を本当に一貫して望んでいたのだろうか。ルネサンスと産業革命以降の近代世界においては紛れもなくその通りである。ギリシア・ローマの古典古代においても確かにそうであった。しかし、中世においては人間は全く異なった価値観の下で生きていたのではなかったか。それは人間本来の本性が抑圧されていたのだとか、本性が意識されなかった程に社会体制が間違っただけであったのだなどと主張するのは歴史を論じる者の態度として間違っている。中世において人類はフクヤマが論じているのとは全く異なった「価値」を持っていたと考えなければならない。

また、現代においても、全く異なった価値を抱いて生きている人々もいるのではないか。イスラム世界は単に社会体制の選択という点でのみ相違しているだけでなく、もっと根源的な意味での価値の点でも相違しているとは言えないだろうか。すなわち、物質的な豊かさや個人の自由や平等とは異なった価値を優先している社会であると考えすることはできないだろうか。しかも、イスラム世界は人類の中でも無視しえない規模を持った集団なのである。

人類の持つ価値が異なった方向に向かうという可能性はフクヤマの本では全く想定されていないようである。しかし、人類の「欲望」「理性」「気概」が近代以降に明確になった価値とは全く異なった方向へと向けられる可能性は否定できないのではないか。現在では、過激な自然保

護主義者などにしかこうした傾向は見られないし、こうした人達の価値に多くの人が全面的な共感を感じて「価値」そのものを変えていくということは確かに想定できにくいし、ばかげているように思えるというのは正しい。しかし、「価値」そのものが変化してしまう可能性を本当に否定できるであろうか。フクヤマはたぶんこの可能性を否定するだろうと思われるけれども、「歴史」が終わったというにはやはり少し迫力が不足しているとは言えないだろうか。

このように考えると、終焉したのはたかだか近代であったということになるのではないかとと思うが、どうだろうか。近代における、物財の豊富さに幸せを感じ、自由と平等を最大限に重視するという価値を実現するための社会体制という点では、フクヤマのいうリベラルな民主主義が、あるいは、私の提出した自由経済民主主義が最適であることが証明されたといえるかも知れないが、それはたかだか近代、あるいは、「長い20世紀」という一時代のことであって、次に来る全く価値観の異なった人間の生きる社会では御払い箱になる可能性があると考えることができるのではないか。「歴史」が終焉したのか、「近代」が終焉したにすぎないのかを、冷戦後の世界でまず初めに私たちは真剣に議論しなくてはならないと思う。

現在の人間が持っている価値を最もよく実現できる社会体制がフクヤマのいうリベラルな民主主義であることに私は同意する。しかし、こうした「理念」の下で生きる人間がどのような状況に置かれるかをよく考えてみなければならない。

こうした社会に生きる人間は「自由」である。カントもヘーゲルも自由を最高の目標とした。

フクヤマはこれに、ドイツ観念主義からヒントを得て、「気概」ということをつけ加える。人間に本当に満足を与える社会は単に欲望と理性に満足を与えるだけでなく「気概」にも満足を与えられなければならない。その意味で経済的な自由主義と政治的な民主主義によって保障される自由と豊かさ以上の、時に非合理的なものを人間は求めるものなのだと彼は言っているのである。

フクヤマの結論は、結局はリベラルな民主主義こそがこうした人間の欲求を最も満足できるというものである。しかし、単に欲望と理性を満たせばよいとする議論とは違って、「気概」をも満たすということになれば、それを満たそうとする社会にはより不安定で微妙なバランスが必要とされるようになる。その意味で、フクヤマの提出する「歴史」後の社会はリベラルな民主主義が理想であることを知っていながら、極めて不安定たらざるをえないといわなければならない。

フクヤマは「気概」を優越願望と対等願望とに分ける。対等願望はリベラルな民主主義において非常によく満足されるものである。しかし、この願望が完全に満たされた社会は実に退屈な刺激のない社会であるということが言える。つまり、すべての人間が完全に対等であるとすれば、優れた芸術や音楽、偉大な学問は生まれないうし、卓越した運動選手もそうした社会には存在しないということになってしまう。社会は全く平板になってしまうのである。

しかし、人間は対等願望だけではなくて優越願望も持っている。人は他人に優越したいという願望を押さえ切れないのである。優越願望はリベラルな民主主義に納まり切らないというこ

とは明らかである。もちろん、経済分野での成功やオリンピックでの優勝といったことがこうした願望の一部を満足させるということはいえる。しかし、フクヤマが言う通り、人間には威信や尊敬のためには命をかけてもいいという非合理的な側面があるのであり、こうした願望がある限りそう簡単には人類の「歴史」後の社会が落ち着いてしまうということはいえない。ただ、フクヤマが強調するのは、どんなに様々な事件に彩られるにしても、それは「理念」のレベルの争いではありえないということである。そのレベルでの争いは終わったのであり、すなわち、「歴史」は終焉したのだ。

### III

フクヤマはこの本の中で、プラトン、ホッブズ、ロック、カント、マルクス、ニーチェ、ヘーゲル、取り分けコジェーヴによって理解されたヘーゲル（フクヤマはこれをヘーゲル＝コジェーヴ総合と呼んでいる）を自在に引用して論じている。これらの哲学者についてのフクヤマの解釈について論じることは私の能力をはるかに越えるものであり、ここでは全く論じることはできない。しかし、Iの部分で私が考えたことからフクヤマの主張に疑問を呈することはできる。「歴史」の終わりという刺激的なフクヤマの主張にここでいくつかの疑問を提示してみたいと思う。

フクヤマは、理想的な社会体制は人間の本性である「欲望」と「理性」と「気概」を満足させられなければならないと主張する。それは唯一リベラルな民主主義によってのみなされることができるとフクヤマは言う。私がIで述べた

である。

長い20世紀は、人間がどのようにしたらより幸せになれるか、それを実現する社会体制がいかなるものであるかに決着をつける世紀であったと考えることができる。ただ、完璧な答が出されたわけではない。確かに、自由市場をベースにした経済と自由選挙をベースにした民主主義という方向性は定まった。しかし、自由市場と政府の規制とのブレンドがどの程度であるべきかの答がそう簡単に出されるとは考えられないからである。このブレンドの具合がたとえば日本とアメリカの経済摩擦となって冷戦後の世界の主要なテーマになりつつある。長い20世紀は終わったのだろうか。

前置きが異常に長くなったが、以上のような関心を持って夏休みになったのを幸いに、たぶん、同じような関心から問題に取り組んでいるはずだとの見通しでF・フクヤマの『歴史の終り』を読んだ。

## II

今私たちがどこにいるのかという歴史意識を持つすべての人にとって、このF・フクヤマの本は誠に刺激的である。フクヤマの所論に賛成か反対かということは全く別の問題である。私たちは冷戦の終わった現在、フクヤマとともに私たちが今どこにいるかを歴史哲学にまでさかのぼって真剣に考えてみなくてはならない時を迎えているのである。

フクヤマは1989年に『ナショナル・インタレスト』誌に「歴史の終り？」という論文を書いた。多分この年に出されて世界で最も話題になった論文であった。当然様々な批判がなされ

たし、また、この論文をきっかけに色々な論争もあった。この本はその約3年後にフクヤマによって出されたものである。

フクヤマは「歴史」は終わったと主張する。ここでいう「歴史」とは世界の様々な箇所で起きる事件のことではない。ヘーゲルやマルクスのいう意味での「歴史」、すなわち、あらゆる時代のあらゆる民族の経験から考えても、唯一の、そして一貫した進歩のプロセスとみなされてきた「歴史」のことである。人間の進化は果しなく続くわけではなく、人類が最も根本的な憧れを満たすような社会形態を実現した時に終りを迎えるだろうと、ヘーゲルもマルクスも考えた。つまり、二人は「歴史の終り」を事実として想定していた。ヘーゲルにとってそれは自由主義国家であったし、マルクスにとってそれは共産主義社会であった。フクヤマは冷戦の終わりを迎えて、こうした意味での「歴史」が遂に終わりを迎え、リベラルな民主主義の「理念」がこれ以上に改善の余地のないほどに申し分のないということが証明されたと主張し、それをこの大著で証明しようとしている。

もちろん、現実のリベラルな民主主義国家になんら問題がないなどということはありません。しかし、この「理念」に対抗する他の「理念」はついに費え去ったとフクヤマは言うのである。

フクヤマは理念的な社会体制が満たさなければならない人間の本性を3つに分けて指摘している。すなわち、「欲望」と「理性」と「気概」である。私が先程述べた自由経済民主主義の社会は現在のところこの人間の「欲望」と「理性」を最もよく満たしてくれる体制である。しかし、

に倣うことが可能であったのである。先進国の先例に倣うことが社会の課題であるとするならば、先例に通じた専門家が社会を指導した方が効率が良いことは明らかである。イギリスにおいて市場でしか明らかにならなかった真理が後発の国々ではあらかじめ用意されていたと理解することができる。イギリスの後を追った後発国、ドイツ・オーストリア・イタリア・明治日本は官僚に主導される形で近代化を急速に進めた。「消費者主権」のイギリスに対して、これらの国々は明らかに「官僚主導主義」の社会を形成した。

20世紀の最初の大戦争である第1次世界大戦は、ヨーロッパにおいて、経済においては自由市場、政治においては自由選挙による民主主義を旨とする諸国と、遅れて近代化を起こした官僚主導の国々との戦いであったといえることができる。

第1次大戦の帰趨は自由主義諸国に軍配が挙がったが、産業のさらに発展した自由経済民主主義諸国になんらの問題もなかったかといえばもちろんそんなことはない。産業が発展し、技術が高度化し、さらに、生産施設・設備が巨大化すると、新規参入の自由を保障していた機会の平等は現実には満たされることが難しい状態になった。それに伴って、市場に参入できる人間と市場への参入が思いもよらない人間に社会の分化が進み、貧富の格差、結果の不平等が一般化した。自由民主主義社会にとってこうした問題は放置できる問題ではなかった。

結果の不平等に対する処方箋としては大きく分けて2つの考え方が提出された考えられる。第1に、自由競争を基礎としながらも結果として生じてしまう格差を累進課税や福祉政策に

よって再配分することで縮小しようとする考え方である。修正資本主義、あるいは、社会民主主義と呼ばれるのがこれである。自由市場に政府がいくぶんか干渉するという考え方が導入されたわけである。自由経済民主主義社会にとってこれ以後、自由市場と政府の介入のブレンドの仕方が主要な主題となる。

結果の不平等に対する第2の処方箋として提出されたのが、自由競争を否定して政治家や官僚の統制に委ねようとする全体主義的な発想であった。左翼の側から出されたのが生産手段を国有化することによって結果の不平等を克服しようとする共産主義の考え方であった。これに対して右翼の側から提出されたのがナチズムやファシズムの考え方で、政治家・官僚が消費を統制し、製品やサービスの一律の規格化を推進しようとするものであった。

左翼全体主義をベースとして国家を造ったのがソ連であり、右翼全体主義によって問題を解決しようとしたのがファシスト・イタリアであり、ナチ・ドイツであり、軍国日本であった。

第2次世界大戦は、雑に言えば、自由経済民主主義社会と右翼全体主義との戦いであったと考えることができる。そして、第1次大戦に続いて自由経済民主主義社会は勝利を収めたのである。

第2次大戦の終了とほとんど同時に開始された冷戦は非常に多くの側面を持っているから、そんなふうに単純化してはいけない（もちろんこのことは第1次大戦にも、第2次大戦にも言えることだが）ことを十分に承知しながら敢えて言うとするれば、自由経済民主主義にとっての3度目の戦いであったと考えることができる。すなわち、左翼全体主義との戦いであったわけ

である。それでは、その戦争では何が争われたのか。何に対する革命であったのか。それらはそれぞればらばらであったのか、それとも一貫したものであったのか。ところで、20世紀とは1901年から2000年と考えることが適当なのか。

そんな時、たまたま一橋大学の田中孝彦助教授から東京大学の藤原帰一助教授の論文のコピー（「長い世紀末——世界戦争・民主主義・国民国家」）をいただき、読む機会を得た。この論文自体は大変難解でしかも大きなテーマを扱っているものなので、ここで議論することはできないが、その中に「我々は今『長い20世紀』の終わりに、そして『長い世紀末』の中にいる」という一節を発見して、ああこれだという感慨を持った。20世紀とは単なる100年間などという年月でなく、まさに「長い20世紀」として考えるべきものであるのだ。では、長い20世紀で争われたものは何か。

簡単に言えば、自由市場、すなわち、人々の自由選択を中心とする自由主義社会と、官僚と国家が規制・統制を行う社会とのどちらがより人々の効用を高めるか、すなわち、人々をより幸せにできるかが争われたのだといえるのではないか。長い20世紀において人間は物財が豊富になることを幸せだと感じてきた。自由主義的な社会と官僚主導の社会のどちらが人々により多くの、しかもよりよい物財を供給できるかということが争われてきたと考えることができるのではないか。これが過度の単純化であることは明らかであるが、それ故に逆に私たちに20世紀の意味を考えるヒントを与えてくれているように思えるのである。

長い20世紀は産業革命後のイギリスにおいて

始まった。神が絶対的な真理を指し示してくれた時代から何が真理であるかが分からない時代となって、人々は正しいものを定める場を市場に求めるようになった。すなわち、市場には自分こそが真理を体現していると称する者たちが集まって、人々、すなわち消費者にその判定を委ねたのである。誰が真理を体現しているか分からない状況にあっては、市場への新規参入の機会には全くの平等でなければいけない。その上で、消費者が自由選択によって選んだものが勝ち残って、「とりあえずの真理」となるのであった。これが自由経済体制の原初的な形である。

政治の分野における自由主義は、以上のような市場メカニズムを政治の世界に引き写したものであるといえる。すなわち、どの政治的な主張が正しいかを決定する真理は存在しないのだから、自由市場たる選挙によって政治的な主張に人々が判定を下す。選挙には誰でもが参入、すなわち、立候補できる。議会制民主主義はこのようにして生まれたと考えることができる。イギリスにおいては他の国々よりもはるかに長い時間をかけて、こうした政治と経済の分野における、いわば「消費者主権」が成立していったのである。

人々をより幸せにするにあたってイギリスのように長い時間をかけて、しかも他国に先駆けて「消費者主権」の社会を形成していった国家は、確かに苦勞も多く歪みも伴ったが、幸運でもあった。しかし、遅れて近代化の段階に入った諸国、たとえば、ドイツや明治日本のような国々は、イギリスのように時間をかけて社会を形成するわけには行かなかった。ただ、イギリスの先例があったことから、全くの手探りの発展を模索する必要はなかった。イギリスの先例

書 評

フランシス・フクヤマ『歴史の終わり』上・下

渡部 昇 一訳、三笠書房、1992年、上332ページ、下317ページ

柴田 純志

Francis Fukuyama *The End of History and the Last Man*  
Junji Shibata

I

この短大に赴任して思いもかけないことに「日本の政治と経済」という講座を担当することになった。大学院に入学する時の試験では確かに「日本政治外交史」を専門科目のひとつとして選択した経験があったので、「日本の政治」の方にはそれほど違和感はなかったものの、「日本の経済」という分野については、「はてどうしたものか」と少しばかり頭を抱え、現在もその状態はほとんど変わっていない。

経済とはそもそもいかなるもので、経済学とはいかなる学問であるかということの本気では考えたことがなかった私であったが、2年ほど前からこの講座を何とか意味のあるものにするために、自分なりに、素人考えであることを承知の上で人間の営みとしての経済のことを考えてきたつもりである。素人であるとして逃げるつもりではないけれども、できるだけ単純化した形で経済を理解するにはどうしたらいいかということ、素人であることをいいことになり自由に考えてきた。この2年でずいぶんと世の中のことがはっきりと見えてきたように最近になって感じられる。

経済学が専門の人には笑われるかもしれない

けれど、経済の目的はどうやら人々をより幸せにすることであるらしい。経済学ではこれを効用を高めるといふ。ただし、経済学では何が幸せであるかとかは余り議論しないことになっているようだ。私が単純化して考えたことで、叱られてしまうかもしれないが、人々をより幸せにする手段として、大きく分けると、自由市場を用いるやり方と、政府や官僚があらゆることを行なうやり方の2つの方法があるように思う。もちろん100%自由市場ということもなければ、100%官僚統制ということもありえない。どんな社会もそのどこか中間に位置していると考えることができる。ただ、そのどこに位置するかによってずいぶんと違った社会になることは確かのようなのである。日本の政治と経済、あるいは、日本の社会を考える時には、こうした基本的なことを知ることが極めて重要なことであるということ、この講義の準備を通じて遅ればせながら痛感した。

最近、ちょっとした講演の依頼があって、今の日本が置かれている位置を考えるにあたって、いったい20世紀とはいかなる世紀であったのかという問題を考える機会を得た。20世紀は戦争と革命の時代であった、とはよく言われること